

平成二十六年六月投句

【高塔山】

ががんぼの脚だけ残り蜘蛛の網

釘刺さる地蔵の背に五月闇

握りをる蛍の光指を透け

勝利

故郷よりこの地に長く枇杷を食む

夏は来ぬと歌ひて山の音楽堂

実梅落つ落つるがままにこの頃は

光子

さくらんぼ食べ始めたらしまらない

独樂のごと廻してみたしさくらんぼ

紫陽花に包み込まれしベンチかな

佳与子

山の湯へ背振嶺つづく合歓の花

かわほりの飛び交へる濛暮れ残る

地蔵堂高く祀りて梅雨の山

真理子

卯浪立つ海へ五分の渡船かな

高層のマンション映る代田かな

眠られぬ夜を通し鳴くほととぎす

節子

登り来し山あじさいに風青く

工場の煙消え入る梅雨の空

垂れこめし雲に遠のく時鳥

由紀子